

翁物語

完

特別  
14  
696  
30





一  
下  
方  
親  
口



小  
書  
存  
玉  
泉  
文  
庫











近年神の布子中廣き常々大招福と為りし  
玉粒多し解々人太穀半を以てしりし小奇  
婦のせしふ今吹柳子のよきとも好色の小奇  
程云ふもあま男女の氣をたしむるに下男下女を固  
めし事のはらみたる玉粒とを以てしりし  
少事神樂入甲斐のりし神乃柳文のりし事  
ともいひしりし事あり

七八拾年以前と尚世習く多事甲斐別し事  
先代上下  
もりし神樂の柳のりし事  
もいひしりし事あり

後名と日章覺の方親に縁を以てし人  
あり公夕神理出し日知度しりし事  
方しりし日章のりし事  
入りし日章方より公公のりし事  
遠いし可き事家用人のりし事  
紙しえりし事  
着しりし事  
以てしりし事  
覺方りし事



新〜旧道〜  
河向〜  
左挑灯青井〜  
池〜  
夏〜  
お〜入と理運〜  
か〜  
逆〜

集運侍〜  
中合〜  
見物物〜  
ろ〜  
嬉礼〜  
挑灯〜  
じ〜

大伴張本〜  
夫〜



し市移り大は於人斗りありて年中きりり  
十道しり親類もし人伴振替年終り一の程成り  
まじり事ありて申ありて申すは不通不抄りて申す  
親類親方へ流しりて申す振替ありて申す  
亦し何れ許成り息年以所る當り縁起あり  
唯く又と誰のい息女々年中縁起の誤合あり  
とらりしんいありて申す申す申す申す  
有じ破損あり人々當年も申す法ありて申す  
年中の不用も誤合し申す申す申す申す

夫以(一)事一疎に親類正月の振替あり又とらり  
申事ありぬ又七月の申す親類も申す申す申す  
子方より親方申す申す一申す申す申す申す  
為さる人々を交りて同申す申す申す申す  
物語も親方より申す申す申す申す申す  
子簡選いの申す申す申す申す申す申す  
流し申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
勿論親類の内も申す申す申す申す申す申す



































































小奇之味録有— 汎濫の者多しは— 笛々歌中も  
夫々の汲者取い 浮瑠理之味も— 汲者取い物  
中可自分— 中其意取い事— 市市事取い 浮  
女中— 自身 浮瑠理之味も— 汲— 中取い 中  
外し— 取い— 浮瑠理之味も— 男— 奇— 浮  
浮— 人— 有— 吉— 取い— 中— 取い— 浮瑠理  
— 中— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮  
— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮

— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮  
— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮  
— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮

一三

— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮  
— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮  
— 取い— 浮瑠理之味も— 汲— 中— 取い— 浮



この別式ツ別ふる事長かき人二人の貴成  
事なり

一四

音を振音り容牙多様なり茶多は外に  
も出しは様過中吸之茶葉も出は近年の如  
様前より吸之を出し酒壺の中も客も  
夫少一は料理のいさしき書書の振音  
は和名酒吸之の出し酒をふりむし親類  
搭別客來の良女は酒は事なり近年の  
酒の酌り着た女と出し張合へ凡吾等事の也

一五

むし口旗中元小身元二百石二百石の奥方母は息女  
少し少し事さ方なり及は通訓と事  
茶物も少し茶物果も中雁分も茶下り  
女はけいし事なり茶人故の家来不足は  
親類中より清く若夫も茶合の事人なり  
中雁り初も茶中雁も茶合の事なり  
先も茶物も茶合の事なり  
茶冠り茶合の事なり  
茶合の事なり







此の勿論の事人解りしる名者しる者おぬ若元  
其人を以て是を其約とししり又男又もり  
夫以て御もすもい人出入り親類もくも其果  
今より小車多うり夫より其御もくも其約  
多親明善善方にも其外も其油も其  
しり池上すも親連石連出る事向り近年の  
其車も其向り

一六

じりも其石の上の人其小車よりぬ人かり石  
以上乃元も人も人をもり衣裝奇麗りて客へ

遊ばり出小車也しり其髪結り世話も草  
履而向り其の喧嘩ありや其車も其向り其年  
其小車も其えり

一七

しり小車履而も其十六の誕も其子も其履而も  
しり其下も其小袖も其着き上り小袖裕も其着き  
其連り其履而も其履而も其履而も其容の遊ばり  
しり其其其其其其其其其其其其其其其其其其  
連り暑氣も其石連り若も連り其其其其其其其其  
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其



方々喧嘩論の事の中へ〜危角主人一室を  
り奴れの人麻花と云ふ小者履取と云ふ其の  
中へつゝは利翁の事ヲ羅巻の河原へ人取を  
着て連中り着る家来也〜一呼〜己  
人幸よ〜流も運〜尚人〜人〜  
其外一呼乃の取取人等〜江戸へ河原尚人  
〜つゝ其外〜織物〜成取〜河原〜  
小者履取世上一〜持〜其後又實文乃〜  
少〜〜〜〜〜〜危角喧嘩出来

危角主人一室を

一

江戸騒平斗り〜茶番女〜小作〜  
よ石斗りの言は尻馬余ぬ〜招〜人〜  
人身元は程又大名も連〜又連ぬ人〜  
〜十八九斗り〜  
白粉奇麗り大夫の〜  
若尻〜紅雲小袖羽織袴〜  
振首分〜川村先〜  
上〜江戸の次持〜入外〜



斗りおる花のくも小法師の池をいふに徳文  
浩舟系亭に出る大坂の料理かき好くよきと  
とく入心常例のくもおのひに  
ゆい出る事もか容事のの挨拶次第のゆい毎に  
ほりきりしものゆいぬ人もすく

一 四十一

正しは口語中流の人をいふ事七月言焼  
よりおる七月は死をいふ聖年七月より大坂七回忌  
より毎年より焼の長廿七八回より焼をいふ事  
より二角よりいふ秋のまきよりみちで切り

焼をいふ事昔のゆいより焼のくも小法師の池をいふ  
下りゆい歩履のゆい梅の園のゆい  
焼系七月は海日より毎夜言ひより明きけり  
よきこと諸家かき好くいふ事一向宗のいふ事  
より言ひ見ゆいものゆい

一 世

昔は西の屋敷の食物かきいふ寛文のゆい  
今年ハ大名の焼をいふ事  
正しは正月水ゆいよりいふ事  
聖年正月は口語中流の人に

一 世三



此後いづれ親類等之句に及達正月十日...  
之海と見合聲方...  
今付容も...  
是れ大...  
池...  
む...  
唐...  
業...  
之...  
業...  
同...  
と...  
世...  
流...  
症...  
八...  
云...

業...  
功...  
同...  
と...  
世...  
流...  
症...  
八...  
云...















































鏡流句一百年以来流々多句あり六七年以来の上も  
も肥前鏡流子藩戸録一述江右見評哲人極永田延年  
七七流句一昔主人を祀茶の事あり流乃者句六七年  
以来は上瑞理もどおけらるる少人毎一えん  
し中少あり又少一曰一上より或方も句句は是  
色直東小といひ流々も句句は延年乃  
上瑞理の事あり流々

一 丑

六七年以来も女中地かしの小神もぬ人々あり  
人々も少く女中上若小袖敷もくも地かしの流

也方の流合流一酒り松川輩乃十の流  
多小袖敷一計妙分も小神も古流介の女も  
小身も中も家老の妻もも人方流一し地かしの  
小神祝言婚礼もも正月かも若る男の質斗目若る  
何き女に地かしの若家録一其流流も計妙の流  
若

一 丑

じしあり一侍中留分も成敗も若一若も家毎  
方一可一た若一の事若料の力留若乃又流  
の流も若も若も延年の流若の事一の世同







ほろろと泣きつゝ、いふ自らの樂海ぬじ  
くもく我流の心算に、事見えたるは言  
分一返達の十一に、事ぶらう千新の正しき  
ふ此法が文句に上賜理又き、合の小弁れと、  
奴うも、いふ、親の、前、退、前、之、中、よ、い、  
く、過、年、を、親、上、賜、理、く、い、い、の、味、と、ん、と、い、く、  
わ、く、又、子、の、珍、さ、い、く、夫、ゆ、へ、若、見、え、く、  
幸、す、入、候、も、也、清、世、の、親、の、い、く、  
此、事、也、

一七十年以前、むく、年、と、人、男、女、文、心、の、文、句、と、  
く、又、ら、い、く、一、は、若、取、進、久、後、は、い、く、  
出、一、年、一、若、出、一、若、出、一、若、出、一、若、出、  
い、若、我、特、或、く、私、才、人、は、い、く、  
丁、一、若、出、一、若、出、一、若、出、一、若、出、  
世、は、い、く、一、若、出、一、若、出、一、若、出、  
私、一、若、出、一、若、出、一、若、出、一、若、出、  
日、前、一、若、出、一、若、出、一、若、出、一、若、出、  
彼、一、若、出、一、若、出、一、若、出、一、若、出、











小栗半有造 同之七部兵衛 孫孫又右造 孫之弟也 牛  
込方より其間乃道幅百間より余り少し 牛込中  
口昔河乃河村外道廣く多し其後 毎夜過切可  
其後丸毛六部兵衛 中根九部兵衛 孫中 小十人 尻より小栗  
半有造 同之七部兵衛 孫孫又右造 孫之弟也 牛  
松平河右衛門 小室吉三夫也 一通り 市ヶ谷田河内  
兩河内より 牛込 牛込道幅中より 牛一横 七十間  
乃道幅より 其後 牛込 牛込 牛込 市ヶ谷  
牛込 牛込 牛込

一五六

牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込

一五七

牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込

一五八

牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込

牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込  
牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込  
牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込  
牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込

一五九

牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込  
牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込  
牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込  
牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込 牛込



堀指半段一船入堀一在堀上テ多ク古河以テ  
小日向の築地小石川の築地出朱武士居居下廻  
シ築地出朱ハ多ク茶々赤城明神等々同白不動  
家指一列也等々田畑斗リ等々右乃四等指有等々  
武士居居所家多ク出朱多ク此付テ堀首迄之年  
に例出朱多ク之年乃内屋夜首迄有等々今野  
河朱一ノ中堀一ノ事也此首迄築地有等々



新見傳記述 正朝入道法入行年八十一歳

寛保十七年未新書集らるる書

唯日と遊らふと書し一十一年及び如き七十  
以来世とす可見乃至國初の事其後近年十年廿年  
乃事の傳(元集)先と百年以半世上江戸にても今  
近年の事多し其書事と乃初年元とむしを  
云し一入らた免り所しに語るもよく其の事

我の物語も財津種英翁乃齡八十一年の事  
四五十歳以前より事記す是れ亦、壯年の可見是れ  
の事書、此れを小倉益雄先生写して予よ見し  
也此物も其書と引事今其款を公知するに政人  
思ひ傳り力へ予と画し事以供乃禱し、つる事と  
是れ事と云し一入らと云し、

右一冊乃事と云し其書に其の事書し中古の事と記す

寛政丁巳九月既望

吾花園又識







一 友人仙果子云... 柳亭翁... 高林寺...  
實保年中... 墓... 柳亭翁... 高林寺...  
迎林寺... 柳亭翁... 高林寺...

天保十三壬寅年  
梅見月吉日

連城亭宇玉是識



若此書者射津種華翁未審何人大約  
係江府世臣八十餘老人也書中有言  
寬延之今而寬延二年野田氏為之改別  
是書成於寬延之初寬文以前其所聞延  
寧以後其所見也見其旨趣慕古愧今  
其辭質直其為人可也見計無有浮虛  
所言雖瑣足以觀時矣是書也較諸江  
村氏雜話其所謂古者未足舊也如以











西瓜のあけ

一 為る母より西丸本より大勲印より難いものか  
三ツカ〜中〜上〜下〜

〜の木の葉

一 為る母按て〜男も有〜本や板倉故因坊守謙代  
の時より府被り〜仲小姓と云〜亦按早〜云〜兄抱し  
〜い〜喧嘩は御〜云〜打擲は色ひ〜者  
屋敷〜帰る右の御中を見〜命は指上〜云〜強  
キ〜御し〜因坊は分心御用事御用事御用事  
中〜御し〜是輕言人棒〜未按所〜云〜若者〜一町  
〜云〜未按所〜女と浪人〜云〜御中〜御事〜

先彼中住成其若の亦〜成敗中分〜叔〜云〜云  
始〜云〜云浪人のおぬ〜其是様〜腰〜私〜件  
浪人〜何の何某〜中の〜云〜云家内〜云〜者  
好〜云〜外家成難〜云〜云〜云〜云  
外祖母の〜云〜切集の物お難〜又云孫の〜云〜下〜云  
山信元の家来小田島町〜者〜云〜云〜云〜云  
〜云〜小田島所の者云云思〜云〜云〜云〜云  
御〜云〜云信元は云云二二集云云河云云信元は云云  
翌日の朝〜云〜云奉行云云〜云〜云男女皆  
外家一町〜云〜御〜云〜云〜云〜云〜云〜云  
〜云〜し〜云〜云〜云〜云〜云〜云〜云〜云〜云〜







庚子季夏瓊華上人勅新せし書  
書曰流俗の衰弊以て予一覽  
し又予の一言に加ふる例の執僻や  
是る人用はしむる

干將寛延三年七月二十日

服部當房

六十七

寛政六年三月廿七日詔入を畢

中山清寛

訓老追加

叔も江戸の銀の旨筆紙は重し加也

將軍様金銀と措かたは天下の金銀諸國へ通用  
し江戸中銀多し其は追記の風義あり衣冠  
當狩の儀も此篇あり年もの武家方にも俸下も綿  
合羽著す人ぬ早人の形以也此應本元石六千石  
あり世の小姓合羽とあり木綿合羽著す人家  
老用人身之當代の小者中下女半妾並に木綿  
合羽とあり世界も元禄八年塚早中村竹生  
座へ女形因山水木辰と下りて顔合せも鏡躍り  
しと末世も衣を感しとて御辰の頃成有馬藤と云



狂言の傾城は、將衣束の袖無代の紅ニを着たり  
今の金襴今縁の衣衣も志志と云々唐織唐織と着右の如く、金襴  
子一と云々元祿の時代迄、渠給將衣束、金銀の箔箔  
紋紋行行あり、高高の如く、上下の奢奢無無く、行行吹吹あり、  
奢奢出出あり、云々金銀金銀、世世上上入入渡渡り、下下高高迄奢奢盛盛なり

古風物語  
八十翁物語

脱漏昔々物語ニテ補フ

一昔ハ土藏持持き、元子石以上の人も稀稀あり、半半込込中中小小日日向  
也也の中中土藏土藏持持き、是是はは世世想想と云々、酒酒屋屋の酒酒持持き、  
是是ハハ必必土藏土藏持持き、外外曾曾入入り、ままもも身身土藏土藏持持き、  
五百五百名名七七百百名名他他の元元土藏土藏持持き、今今迄迄年年土藏土藏の如如  
人人の如如し、所所人人ハハ夫婦夫婦斬斬り、白白くくししの者者もも土藏土藏持持き、  
ららとと持持昔昔ハハ是是ホホとと遠遠く  
一昔ハ、能能ハ、縁縁者者の教教合合あり、人人ととあり、の如如く、家家束束の仕仕をを外  
何何年年もも六六六六年年、昔昔ハハ時時もも親親親親方方又又  
孝孝人人也也人人とと別別あり、人人とと教教合合の上上証証とと云云ふ



と利不念越度せし末迄首尾歴々先々も親戚共親方  
老人と上座を申す其自身も備ふ身老人と敬す其  
古例先例と云ふも此の化人等も分別あり人加事の意  
の道理をわんち物と云ふ迄年の若き迄は當風の年利  
發するや一節も別物なり其強備せん多入に體合す年  
かゝりぬめ體合おは中庭同様の若者と集り心のふ  
體合する古例と云ふ人の敬ふかゝる一寸かゝる  
すゝぬ治りいゝぬ

一 迄年の去後おし時元は方中半去方山息女針ぬぬ  
中よぬ及下中よぬと云ふ上より中取上は一節も  
年迄は半を更ぬし一節ぬし一節ぬし美を更ぬぬ

海者カミのくかゝ上より體ぬぬ女の縫物針細子の落い美を  
皆迄年好女の文心也糸係をぬ上よりぬ能てゝ別  
環所の御前役者の故所年迄より上りの中半更ぬぬ  
是好女の心入海なる

一 昔の女の風俗迄年と云ふ小袖の物取十五の歳の女は此の  
物取廿四五歳半斗の女は七十年迄は物取四十五歳の  
女は七十年迄の物取十五以上六十斗の女は後室むすい  
七十年迄は物取を着したるありくも七十年迄の物取の  
歩み帯のあはれも七十年迄は物取すも七十年迄は物取  
歩み帯のあはれも七十年迄は物取すも七十年迄は物取  
歩み帯のあはれも七十年迄は物取すも七十年迄は物取  
歩み帯のあはれも七十年迄は物取すも七十年迄は物取







細きものか、細く朝半目、屋敷、昔年、近年、  
界一の梅頭、女、名、悪女、この世、一、大、門、年、の  
物、是、是、然、し、自、自、自、自、自、自、自、自、自、自、  
お、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、好、  
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
の、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、蓋、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

一、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、昔、  
盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、盃、  
酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、



二六日



